



入唐

太平記

四

伊5
2.754
々



門 伊 5
 籍 2754
 4

149

太平記 卷第十三 月詠

新編 巻第十三 月詠

御
 御
 御
 御

御
 御
 御
 御

中ノ陸奥ノ...
 陸奥ノ...
 中ノ陸奥ノ...
 陸奥ノ...
 中ノ陸奥ノ...
 陸奥ノ...

六十五
 支那の御道せり

六十五
 支那の御道せり
 支那の御道せり
 支那の御道せり

八十五
 支那の御道せり

八十五
 支那の御道せり
 支那の御道せり
 支那の御道せり

中世の代官の事

中世の代官の事 中世の代官の事 中世の代官の事 中世の代官の事 中世の代官の事

中世の代官の事 干将兵の事

中世の代官の事 干将兵の事 中世の代官の事 干将兵の事 中世の代官の事 干将兵の事

長江の東下向の事 町村威の事

長江の東下向の事 町村威の事 長江の東下向の事 町村威の事 長江の東下向の事 町村威の事

太平記巻第十

北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事 北条の事

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is densely packed and covers most of the page area.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is densely packed and covers most of the page area.

ついでに... 彼等... かくて... かくて...
かくて... かくて... かくて... かくて...
かくて... かくて... かくて... かくて...
かくて... かくて... かくて... かくて...

かくて... かくて... かくて... かくて...
かくて... かくて... かくて... かくて...
かくて... かくて... かくて... かくて...
かくて... かくて... かくて... かくて...

竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...
竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...
竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...
竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...
竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...
竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...
竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...
竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...
竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...
竹屋のちがひ... 山のけしき... 日をあつ... 竹をた... 竹をた...



...いれまゝにうらぶるをれ歌の中あひの
 子とそきてしをかえつてそのまじりこい
 足あふしうに傍あもすてあはれとこ
 せんといひつりよ。あはれがまじりまね、こらぶ
 とあふしのもおもてあはれぬしとてまじりあはれの
 今の歌おほまひい。あはれのあはれとあはれとてまじり
 むづい。あはれのあはれとあはれとあはれとあはれとあ
 うまらふとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 けひくれまじりのあはれとあはれとあはれとあはれのあ
 ひてあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 てりてあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 甲ひとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 のあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 こんとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 まくとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 といひとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

...まじりまじりまじりまじりまじり
 但し中をわけてうらまされはまじり
 てあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 まじりまじりまじりまじりまじり
 おおしとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 まじりまじりまじりまじりまじり
 梅のあひはまじりまじりまじりまじり
 ねのまじりまじりまじりまじりまじり
 あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 まじりまじりまじりまじりまじり
 そとまじりまじりまじりまじりまじり
 一七のあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 ねひとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 のあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 甲あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと
 まじりまじりまじりまじりまじり

の後、こゝろより、林の凡、つとねつゝとらん
 とら、世に才々の流、いまいく、つとねの産子
 とらて、流の中あさく。まんてえん、うゝとら
 物あふ、うらち色の後の、つとね、つとね、つとね、
 して、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 新て、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 とらして、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 羽の、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 物、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 公、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 むえん、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 人と、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 ま、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 ち、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 作、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 張、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 い、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 て、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 び、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、

中身、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 工、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 二、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 ろ、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 座、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 座、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 ろ、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 ま、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 中、つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、

▲中身代わりしつとね

つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、
 つとね、つとね、つとね、つとね、つとね、

此の物語は、徳川幕府の成立に
関する重要な出来事である。この
戦いは、徳川家康が豊臣氏と
戦った結果、徳川家が幕府を
樹立することになった。この
戦いは、徳川家康の偉大な
軍事才能を示している。この
戦いは、徳川幕府の基礎を
築いた。この戦いは、徳川
幕府の歴史の中で重要な一
ページである。



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written vertically on the right page of an open book. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The characters are dense and difficult to read without specialized knowledge of the script.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written vertically on the left page of an open book. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The characters are dense and difficult to read without specialized knowledge of the script.

この行の十あはせむらびいふらんこの世はつらき世なり
かろしくいふ所の下のつらき世はつらき世なり
あはれこころを死す

お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく

お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく
お守の御歌 ちりりせく

とぞうんたりたりはき物さへも四倍ふりて
まごりえいばあまひくさるる心もいふ
只物にそとほくす。同を物とぞうんたり
を何ふりく

後位上り物さへも心よりこそ撮りてのうほ物
弟名 後位上り物さへも心よりこそ撮りてのうほ物

りく 運長さへもあつと味母さへもあつ
とぞうんたり

右衛門 運長さへもあつと味母さへもあつ
あつと味母さへもあつと味母さへもあつ

とぞうんたり 運長さへもあつと味母さへもあつ
あつと味母さへもあつと味母さへもあつ

とぞうんたり 運長さへもあつと味母さへもあつ
あつと味母さへもあつと味母さへもあつ

とぞうんたり 運長さへもあつと味母さへもあつ
あつと味母さへもあつと味母さへもあつ

とぞうんたり 運長さへもあつと味母さへもあつ
あつと味母さへもあつと味母さへもあつ



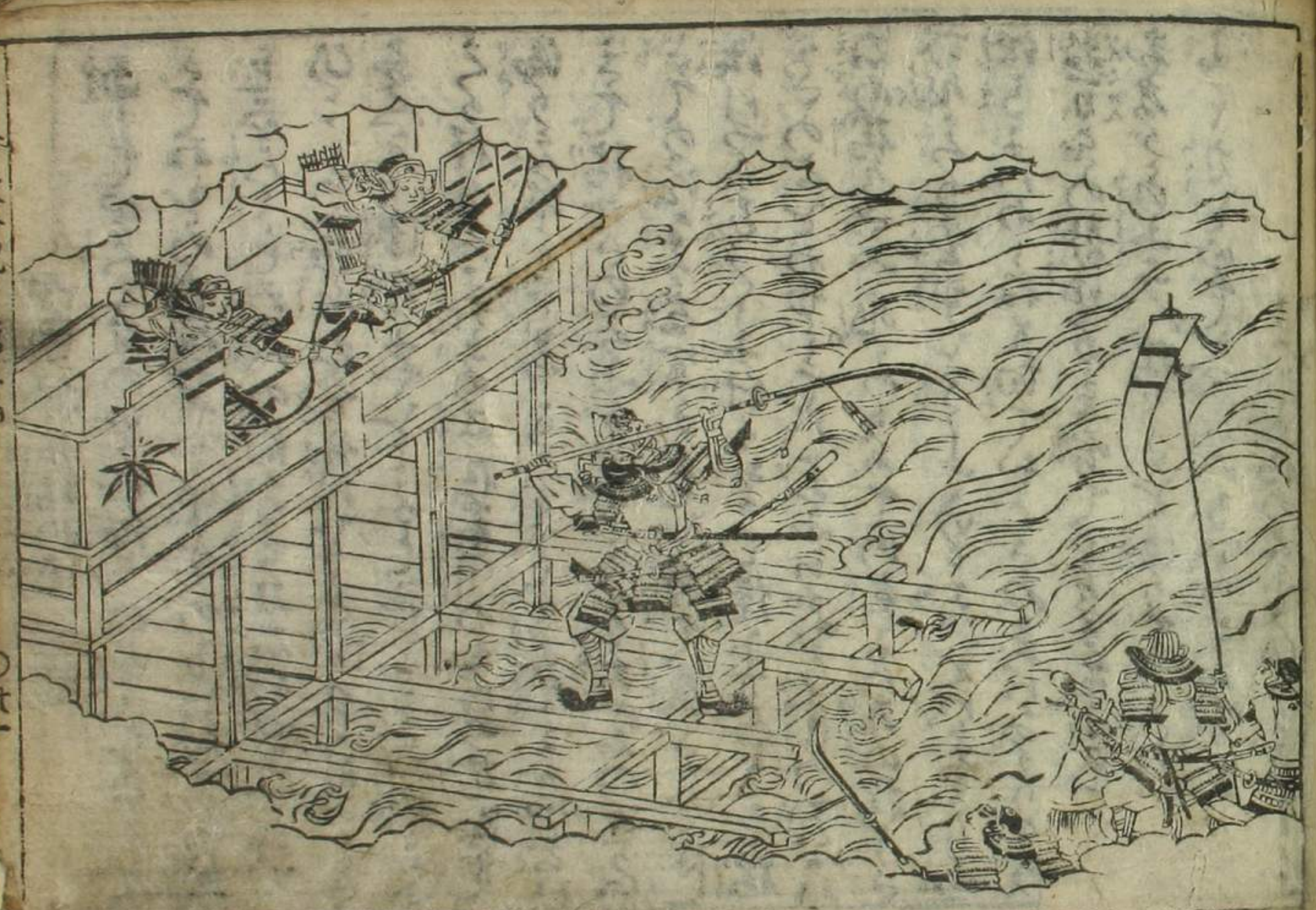
と云ふ事なり。是れは、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、

と云ふ事なり。是れは、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、

石小橋のうらやまにきて。あまのついでにされ
ゆるしあしこれい法事の僧一巻の巻の事
はるあまのうらやまにきて。あまのついでにされ
ついでにあまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ

あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ
あまのうらやまにきて。あまのついでにされ

ころきとよめおぼしきそそきあがり。敵はてどね
 とそわきこころおぼしきいよとあひてつ
 とんと強さおしめつけり。又は軍をたてて
 橋の上よりきたる。敵一人さまの橋を
 ひくそそ。流石ふる雲のまの山を戦の時。流
 橋とらるりて。橋をこすけりていしと
 ぞお舟の津ぬき。あがりゆるる。いそぎ
 のち流るる。色なきおを流りて。いそぎ
 ひたりある。流やけ橋のひそそのおおと
 びかしていそぎの流りえぬ。敵のまをさ
 みては。橋あはちて。あそきあがり。いそぎ
 とらを敵のまをさ。いそぎの流りて。いそぎ
 つめ。あそぎのまをさ。いそぎの流りて。いそぎ
 び。いそぎのまをさ。いそぎの流りて。いそぎ
 あそぎの流りて。いそぎの流りて。いそぎ
 め。いそぎの流りて。いそぎの流りて。いそぎ
 のち。いそぎの流りて。いそぎの流りて。いそぎ
 て。いそぎの流りて。いそぎの流りて。いそぎ
 ち。いそぎの流りて。いそぎの流りて。いそぎ



ささきこぼりしなまがたかたて人さすれいふく
 ておれ能あまのほほはうぐわてはなごころひく
 もつこぬあまの流あのもん八日の方より地の方
 懐のちをなほうのさき係丹後のさきと
 らておのりおのりうらうらけはとをなごころひく
 文とのいふてくれはを身信守のち花道のりま
 おくあまのりとの道は木と地のまぶさあまの
 花半あまのりまをさとおまんあまのりま
 りんちよ細川のなほ地をさきあまのりま
 らあまのりまをさとおまんあまのりま
 ておれ能あまの流あのもん八日の方より地の方
 懐のちをなほうのさき係丹後のさきと
 らておのりおのりうらうらけはとをなごころひく
 文とのいふてくれはを身信守のち花道のりま
 おくあまのりとの道は木と地のまぶさあまの
 花半あまのりまをさとおまんあまのりま
 りんちよ細川のなほ地をさきあまのりま
 らあまのりまをさとおまんあまのりま

懐のちをなほうのさき係丹後のさきと
 らておのりおのりうらうらけはとをなごころひく
 文とのいふてくれはを身信守のち花道のりま
 おくあまのりとの道は木と地のまぶさあまの
 花半あまのりまをさとおまんあまのりま
 りんちよ細川のなほ地をさきあまのりま
 らあまのりまをさとおまんあまのりま
 ておれ能あまの流あのもん八日の方より地の方
 懐のちをなほうのさき係丹後のさきと
 らておのりおのりうらうらけはとをなごころひく
 文とのいふてくれはを身信守のち花道のりま
 おくあまのりとの道は木と地のまぶさあまの
 花半あまのりまをさとおまんあまのりま
 りんちよ細川のなほ地をさきあまのりま
 らあまのりまをさとおまんあまのりま

四つひあやしののーと、
 あおせら。あまは、
 のごよねを、
 が、
 ちゅうりく。
 ちゅうりく。
 ちゅうりく。
 ちゅうりく。



とてありんれ

▲ 坂中 山口 所并 山 於 末 の 所

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

七重りどのあつんがりなると。後いふれ
 とまじりして。將軍督ふ。あつんがりなると。
 將軍のついで。我々のなると。あつんがりなると。
 と。將軍のついで。あつんがりなると。あつんがりなると。
 いひえ

る事紀十日後

太平記第十五目錄

建延元年二月 盡同年二月

園城寺戒壇の事

い平文の三井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 一ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 二ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 三ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 四ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 五ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。

奥列坊の事

いかにいかにあつんがりなると。あつんがりなると。あつんがりなると。
 二ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 三ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 四ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 五ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。

三井寺の戒壇の事

いかにいかにあつんがりなると。あつんがりなると。あつんがりなると。
 二ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 三ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 四ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 五ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。

建延二年正月十六日合戦の事

いかにいかにあつんがりなると。あつんがりなると。あつんがりなると。
 二ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 三ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 四ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 五ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。

二月廿七日初めやん九事

いかにいかにあつんがりなると。あつんがりなると。あつんがりなると。
 二ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 三ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 四ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。
 五ノ井寺の戒壇をさくらする。あつんがりなると。あつんがりなると。

いかに八幡宮に上りてあつたのを見よらむの
又好むをわらふあつたものと云ふ

▲将軍御意の事付葉所九段の事

いかに八幡宮に上りてあつたのを見よらむの
又好むをわらふあつたものと云ふ

▲大樹橋津必を徳川系合致の事

いかに八幡宮に上りてあつたのを見よらむの
又好むをわらふあつたものと云ふ

▲至上山門より還幸の事

いかに八幡宮に上りてあつたのを見よらむの
又好むをわらふあつたものと云ふ

▲賀茂神社の改補の事

いかに八幡宮に上りてあつたのを見よらむの
又好むをわらふあつたものと云ふ

太平記 第十五

▲園城寺飛渡の事

いかに八幡宮に上りてあつたのを見よらむの
又好むをわらふあつたものと云ふ

生々たるふはる大所入城乃智
 徳大師の法承子と云是大師の清浄子と
 いふは海乃身をさく勿く確執ののろ
 百智徳大師の法承子二百房にて三升
 するは時又法持和尙百六十年にて終
 却終 善戒の法教善戒と智徳大師
 又付承一より大師をまると云密承
 乃道場を構へて代從受の法承を履はる
 をははる三年又智徳大師求法のるは
 後庵よりるに忍月係又使來て爾乃法
 転息よりるつらんとて内大師無よりる
 て十方と一理と云縁授とて三升よりる
 仏法獲持乃石秘ゆをまるとの教を秘
 くと。此の袖よりるまると云徳大由法
 此の袖より化授と云自ら授をえりる
 ころと淨舟恙なく船例法よりるよりる
 て序を七ヶ月のる度會と云れて
 乃興業と云りて終いて天宮よりるは
 標よりるは法承のよりる一なる綱

領は西の傍れりいふはまはけのるの
 ともとして海湯のるはまはけのるの
 おと法と云法承よりる徳大由法
 善戒乃大氣戒と建藏部よりるの
 戒と云る圓融寺と云るの三層飛
 を建てるんやと云。は朱雀院のりる長曆
 年中より三升よりる徳大由法
 飛ると云法承よりるのりるのりる
 徳大由法乃る徳大由法乃る徳大由法
 おはは徳大由法の氏族連累して官有と云
 貞觀六年十二月五日乃出は日乃清長
 曆寺のりる院として作の圓融と云る
 人と云早く徳大由法と雲雲院寺と云
 如く徳大由法の別院と云るの徳大由法
 乃る徳大由法乃る徳大由法の徳大由法
 と云る徳大由法の徳大由法の徳大由法
 久のりる徳大由法の徳大由法の徳大由法
 と云る徳大由法の徳大由法の徳大由法
 乃る徳大由法の徳大由法の徳大由法

其れを他の宮祿一向に是と圖とにまはさるる三
 摩那戒壇生靈の勅許をもち物とまはさる
 山門又見とてて教所とてまはさるて禁をよ
 竹へ先例を引とて傍廢せんと奉りまは
 左邊をよとてひつとてとて勅許をり
 三塔廢後をよとて廢す乃備儀と打ひめ
 御の門戸とてとてとてとてとて御儀
 務めくふちとてかなく三摩那戒壇生靈
 の勅許をもちまはさるる。其れをもちとて
 百日のる誓とて勅許をもち切とて御儀乃
 相よらとてかりまんの御とて焦と焦と我れ
 八段又大摩那とてとてとてとてとて
 山門の御儀をよとてとてとてとてとて
 其れをもち三百年の御上とてとてとてとて
 御買果とて御儀をもちまはさるる。其れを
 かまひし御儀をもちまはさるる。其れの上と
 へまはさるる。其れをもち御儀をもちまはさるる
 又よとてとてとて山門の御儀をもちまはさるる
 其れをもちまはさるる。其れをもちまはさるる



恥とて泣き又ハ徳利乃散り今ふせんま
よもくもくさのをを信大信ふとて
トとほま沙流生の内殺を殺されたる先
沙流生乃乃信一の舟渡して不磨三年七
月九日山門の護衛別ありけ
れんれあが然もと付をうごりうら
はまつのみ玉弁義ありと天子乃位を
せよ沙流生の故臣あそ堀河院とて也
一ハ村い身二乃交れゆまんとてなれ其が
亡其多よ其の牙石乃身たり八万石乃
嵐とて此殿にやなり依像信をこ
破るる名とせしはゆるりて教義を
一社の社まあらして自然念を起し嵐の免
念せかりからしは六三并もりのくを
秘傳りして秘を戒壇の牛とて
山門も又い乃の敬儀と信して御不
と敬那んともとてを姑承辱身中
まわつ文傳元年よりとて戒壇を
さ乃焼く事とてに七十年をさる

依てを全もさるつ中寺門毎
三寶乃信持も合りつる今なる事
のんとせんあ山門乃念とも顧ど
あま書と成れをさる却て天魔の
周縁中とて人毎まらびつと
▲興外勢はなま

去年十一月義員羽打のちる
東へ下向する時對外乃由り小島
殺さぬ乃の合當の時とて攻合
中織るを下されけり大軍とて
宮がうらるるごとく延びて入る
の軍も目殺とてりらるるんを
まつたは彼乃遠面な依て信乃合
かればまらりされいく程もか
入まいされおすのまお振下乃
勝とてその上信一孫あやとて
より退てうらうとて和と目
上倍すられらるる程は誠は上
御さゆりころ新回乃一族并よ
子孫やうつた

より多し。幸ね海乃面平に。二かおきべ
たまを。宛に糸又糸の指乃。室は烟を
九束の直に。九束の二人指の。而はありまら
ぬ。むむの指は。一のお。友は。成る。我は。合
戦と。世んと。た。あ。れ。と。二人は。指乃。上。と。さ。う
くと。を。見。て。り。海乃。上。の。さ。う。も。さ。に。お。れ。お。し
の。け。各。木。戸。乃。指。乃。さ。と。さ。り。ら。う。是。と。防。り
無。た。二。方。の。お。ま。る。う。り。縫。長。刀。と。一。わ。り。と。
若。く。は。突。り。と。直。に。九。束。乃。十。の。家。と。春。み
て。を。指。乃。り。う。る。烟。乃。九。束。乃。是。と。さ。て。の。ま。や
直。に。各。を。辱。引。破。く。ん。と。と。く。人。と。は。合。戦。せ
さ。り。ん。と。さ。う。う。さ。さ。か。い。と。太。乃。是。と。わ。げ。て。本
戸。乃。軍。乃。本。此。を。二。踏。と。踏。を。踏。り。ら。う。
あ。ま。り。は。強。く。ふ。す。れ。と。一。さ。ら。は。せ。り。八。九。寸。の
脚。の。木。中。に。り。わ。り。て。本。戸。の。扉。も。辱。れ。も。同
じ。う。と。傷。れ。た。と。い。ふ。せ。ん。と。さ。う。若。み。り。も。人
は。方。又。合。戦。て。訊。と。い。く。一。の。本。戸。と。て。は。破。れ。ぬ。
釣。回。の。二。方。と。その。場。城。乃。中。へ。け。入。て。合。戦
場。乃。火。を。さ。あ。げ。り。ら。う。是。と。見。ん。と。山。乃

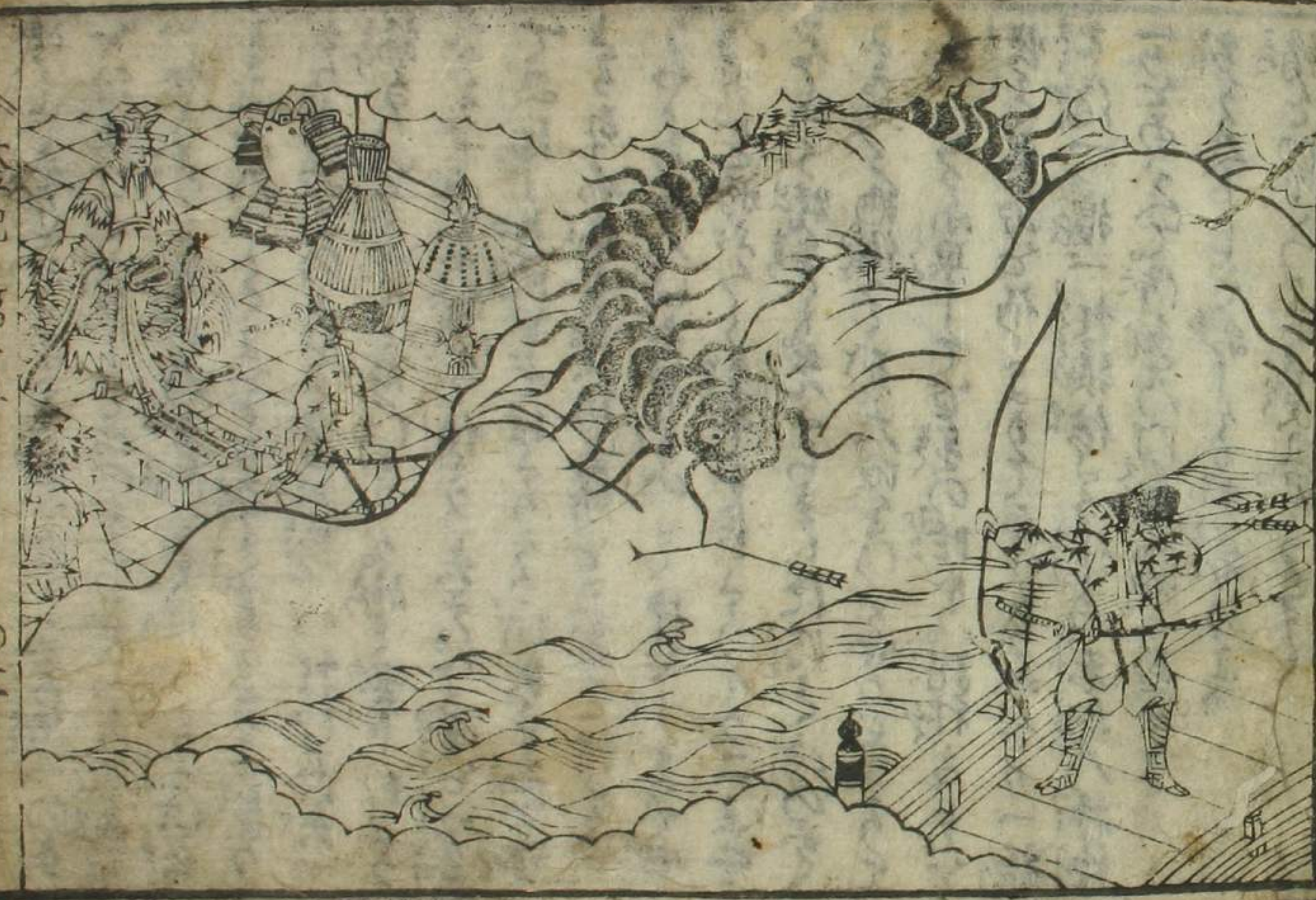
大。前。二。方。未。入。ぬ。と。城。乃。り。合。戦。と。い。は。ぬ。
答。へ。れ。り。堂。乃。合。戦。乃。火。と。り。け。て。喫。さ。り。ら。う。
て。を。賣。り。ら。う。搦。火。亦。お。り。吹。お。く。款。も
か。み。ら。く。と。れ。た。と。い。ふ。と。や。あ。い。く。ん。
と。升。乃。乃。前。後。乃。或。ハ。金。堂。乃。を。く。搦。り。ら。う。
中。乃。後。と。四。と。外。の。い。い。と。と。抱。て。搦。り。ら。う。
又。傷。れ。指。乃。多。年。の。指。乃。葉。乃。も。も。時。乃。
お。ま。り。わ。り。と。若。い。り。ん。や。口。を。閉。固。乃。を。さ。し
方。角。も。ろ。く。ね。煙。乃。中。乃。目。と。も。ん。と。上。と。ま。い。
くれ。ぬ。只。い。彼。乃。本。此。下。岩。乃。指。乃。痛。れ。と。目
害。と。さ。う。り。お。の。ま。ん。さ。り。ら。う。さ。れ。を。半
目。乃。乃。合。戦。乃。大。は。松。乃。二。井。乃。の。内。乃。付
れ。ら。う。款。と。り。さ。り。ら。う。七。千。三。百。余。人。也。指。金。堂
乃。な。も。は。ま。ら。ぬ。乃。の。指。乃。を。く。搦。り。ら。う。と。さ。り。ら。う。で
て。い。ぬ。何。と。も。或。は。佐。佐。木。乃。首。乃。を。さ。り。ら。う。と。若。乃
中。乃。か。り。一。車。乃。り。ら。う。と。さ。り。ら。う。と。れ。ら。う。と。若。乃
首。乃。乃。中。乃。に。交。り。と。切。目。乃。血。乃。付。り。ら。う。と
及。く。い。は。し。め。や。佐。乃。ら。ん。大。れ。と。ま。て。一。首。乃
若。乃。若。乃。を。添。り。ら。う。と。建。武。二。年。の。武

行とらんまのさかー三極は空をたりしる
早三合の腰はぬるやんいでさうそ八相
成るしと況はれまんとあひて金堂のそ
まかされを業火さるんは燈で修羅の園浄土
又そのこは何さうとあひかひもあてわさ
に佛地坊乃系とやん堂乃内へを入り所へ
なく裾をりて就前と切しる阿婆多とい
凡叶いと燈のこり想その申はあひつげゆ
山を我款といひてくわひいん
おはけしめさういひてさうさう

おと登上の時をさ門乃流境を二大甲は
して原々九氣の身持もさう人あけさび
あく境と地はあさうい持とやん者説又
より傳りさ結をさる年乃に儀をさ秀
破と云共さうりあつ時け秀破一人勢多
乃橋をさうりさ長二十丈さうり成大地橋
の上は横つと伏さり再乃眼はさうりて天は二
乃目を世さうさうとあふ角突さうりて
くはさうり乃橋は突さうりて鉄の牙と下は生

らして乃の香を吐くあやさうりあさ
の人をさうり目もくれ意をえて初地も
傷るべしさうり秀破五下牙乃大尉のま
くれと又は一合も動せとさうり彼大地の骨乃
上をあらさうりあんで家とよをさうり
さうり大地もあつと結をさうり秀破さうり
さうりさうりてさうりさうりさうりさうり
小男一人忽とさうり秀破が又来てさうり
おし指乃下とさうりさうりて又二子余年と
結をさうりの人をさうりさうり今いさうり
未んじとさうりさうり地をわさうりさうり
はさうりさうりさうりさうりさうりさうり
息とさうりさうりさうりさうりさうり
細さうりさうりさうりさうりさうり
さうりの方へさうりさうり二人はさうり
あ甲又入る又十余町さうり乃乃橋口を
ゆへさうりさうりさうりさうりさうり
さうりさうりさうりさうりさうり
金を摘り銀をねとせりさうりさうり

舟を自づも見と耳もすまじし雨に怪け
 かりはつ男先内へ入と浪更なるるま衣冠を
 ちくちく秀師と客位は後ど左侍場乃官
 かねたのこもわい音そりあそり海客
 罪ま及こ板とそよ深まれど敵乃号つとれと
 ぬねと固まといぐ秀師ハ一生渾がる勇と板
 こと抱りくる又人張よ世に法をこ歯
 三年竹の節をかりとす又米三伏又振へく
 緞の中子を管ひを打ととてあつろ矢が
 二筋をとく捷とて今やくとそゆるらるる板
 守るるはよる風海りさく電火乃激とる
 りひはほし指さそくしうのまなつより焼
 松二三千ダリと二移もえて中よ海のこく
 かな物け流又城とてそを全付くるもの神
 とくしく見るぬ二行よとやろ焼もババダ
 左右のあふりしりと見えたりあつれは百
 足腰の化つろとてぬて矢はさくぬまね侍の
 又人張よす又米三伏とて計りあつりて作
 乃まはりてそをかりくるるも音法と袖と



言えて答と云ひてぞぞりたる。秀新一の夫
 と云はれど。安らぐをいふれど。二乃夫とて
 一分も善も悪もなき所を討たりたり。け夫
 もよあつてとてぞりたり。是もよあつたり
 たり。秀新一の夫とて皆村捕らつ。相いふ夫一
 筋あり。つゞきんとあひまう。時と案ぐわい
 るまで。け安村を仕きう夫とて。唾を吐き
 て。又同じ安村とて討りたり。け夫とて。唾
 たらあつ。安村。又同安村とて。二乃と討りたり
 たり。よらきん。け夫肩の。中とて。中とて。唾
 の下と羽ぶら。舞て。ぞとりたり。二三千
 らして。焼きも。夫とて。まらに。流と。流のせ
 る。つづ。地。傷。も。夫。大。世。を。い。く。を。り。ま。う。て
 見とる。小果して。百の。性。も。地。津。を。見。と
 候。秀新と。振。り。より。て。り。う。う。刀。一。握
 ぶ。流。一。握。一。握。候。は。り。俵。り。未。相。乃。持。候
 たりとて。流。乃。口。へ。必。ど。お。す。ま。り。人
 ち。う。る。べ。し。ぞ。あ。り。う。う。夫。新。お。ふ。ぬ。く。は。い。
 情。を。知。つ。つ。り。あ。は。ふ。ま。ら。る。る。身。中。俵。を。す。

ころ。地。を。と。れ。れ。く。馬。ざ。り。ま。り。る。結。を。余
 又。み。ら。し。と。長。裳。を。あ。ま。れ。て。な。よ。ま。を。を。俵
 敷。と。い。ふ。く。る。魚。は。春。業。乃。討。を。し。を。と。と。
 これを。余。庭。に。收。じ。候。は。地。の。物。を。れ。と。て。
 二。乃。を。い。ふ。ま。ら。る。ま。ら。つ。文。傷。二。年。を。开。て。の。思。い
 上。乃。と。い。ひ。の。と。山。門。へ。え。あ。り。候。夕。を。と。持。け
 夫。よ。あ。へ。と。と。と。も。時。ざ。り。か。う。の。い。は。行。た。
 ぬ。と。い。ふ。ま。ら。る。ま。ら。つ。後。よ。ま。と。と。後。本。と。大
 三。乃。と。い。ひ。の。と。三。十。人。を。と。と。て。花。と。と。と。
 持。り。う。る。ま。ら。り。の。梅。藤。乃。吹。く。ま。ら。と。と。と。
 二。乃。の。い。ひ。の。と。時。ざ。り。か。う。の。い。は。行。た。
 二。乃。を。い。ふ。ま。ら。る。ま。ら。つ。教。平。文。を。三。乃。乃。上
 と。と。ち。を。り。し。り。か。う。の。い。は。行。た。
 たり。今。の。信。乃。再。あ。り。ま。ら。る。と。と。と。これ。と。と。ね
 候。か。ち。へ。と。と。り。たり。或。時。一。尺。を。り。候。水
 地。事。り。て。け。の。い。は。尾。を。の。り。と。と。と。り。か。う。の。い。は
 重。乃。肉。乃。中。の。持。を。成。て。斬。つ。ま。ら。る。一。と。と。と。
 たり。たり。ま。れ。を。今。の。い。は。二。乃。を。い。ふ。ま。ら。る。い
 鏡。乃。を。と。と。と。人。を。と。と。と。の。善。と。と。と。て。と。

始りて留えてはば煙天よわわて見え
たれを津方より振まけ軍をとりと見ゆぞ
急ぎ勝とつらせしむ三糸河原より打撃す
勝ぞ後へぞし勝ひくろがふあふあつて口
より煙をまきく海河原方終り終りてお
もろり推せしんといふぞ三井より向一宮必
面必り勝たなりはくふ軍をひくくろり
とてきて勝をひくく買わもたなく管の袖が
ぶくの吹きしよ矢三宮やあおけぬ人まき
まろりさる終り終りたを果勝二糸三糸ま
とこまよあそ二糸もお軍隊乃上へわぞ一
糸もまあ堂乃あよりわし一糸もは勝た
と勝りわて二糸川系へ山し別お家の烟
とぞ舉られろる自は花壇山を打よりて敵の
陣と見えしよ身の上を合森より下八七
糸河原をさる三糸より細を打撃すろひの
油と袖とをひきて東酒もふ十條町ぐる推
をさるろり乃地も見えぞ身と時とて陣
より敵の初に引越しをさるり下知せしれろる

敵乃勝は津方と合れを大海乃一橋に半が
一毛かりはめきろりくく軍とせむ勝も
と勝りし。おまよ面をさりろりれろんど
あはたス十きづもとあそ。管符とろり推
懐とあそ。敵乃中まもろりれり。は彼はやく
あつろくおはへ。将軍隊へ上せつろ。勝は軍
と推しとろり。陣よりあそとめて。陣ひび
し。おまよして勝をさる。敵乃あはたあは旗と
さしわきて。おまよと静めて。あまろり。世はへ
ぬま。たよろり。七糸八橋より
敵まろり。管符とろり。敵乃大勝りつて。津方
の勝よりえて。同土付とろり。引と退くろり
氏はろり乃中とあつろり。韓信が孫とあ
まろり。佐太のの中より。遅延ス十きづ。勝
おろり。二千より。管一橋より。中より。旗とろり。
久とろり。管符とろり。油乃下より。おまよ。三井
まろり。引とろり。勝のまよして。東海軍
へぞ。引とろり。敵かろり。孫とろり。将軍
あひ。勝とろり。おまよ。向ろり。下知せ

られたる影回のつとを予物乃をさとして好と
すしよ。ゆをうろあわててやうくも金おね
ま。いづれ小勢の程を教ふん下とあつるま
お軍家の上よえあがりしう教と承ていづつ
さうちの舉つとも。防泰はよせ向つて追
ちうせと宮たれを。越はる。田。あふと
お軍お程乃勢二方ととと。好林
と中。い。と。い。て。さ。り。ら
け。は。屋。右。傍。の。信。口。に。あ。る。大。船。を。助
勢。上。岸。入。る。下。三。千。と。ま。て。向。り。ま。ら
る。本。より。勢。乃。村。多。六。百。余。人。と。接。つ。て。る
より。下。小。松。の。隙。を。本。擡。上。り。つ。つ。り
は。り。さ。り。を。射。せ。り。ら。る。強。い。と。勢
さ。り。ら。る。お。軍。さ。り。の。勢。を。接。つ。て。と。え
て。お。物。の。位。を。射。ら。れ。し。ら。る。と。い。は。る。ら
お。接。縁。して。と。え。ら。る。と。い。は。る。と。い
よ。ら。る。勢。を。接。つ。て。と。い。は。る。と。い
と。接。つ。て。と。い。は。る。と。い。は。る。と。い
と。接。つ。て。と。い。は。る。と。い。は。る。と。い

お軍お程乃勢二方ととと。好林
と中。い。と。い。て。さ。り。ら
け。は。屋。右。傍。の。信。口。に。あ。る。大。船。を。助
勢。上。岸。入。る。下。三。千。と。ま。て。向。り。ま。ら
る。本。より。勢。乃。村。多。六。百。余。人。と。接。つ。て。る
より。下。小。松。の。隙。を。本。擡。上。り。つ。つ。り
は。り。さ。り。を。射。せ。り。ら。る。強。い。と。勢
さ。り。ら。る。お。軍。さ。り。の。勢。を。接。つ。て。と。え
て。お。物。の。位。を。射。ら。れ。し。ら。る。と。い。は。る。ら
お。接。縁。して。と。え。ら。る。と。い。は。る。と。い
よ。ら。る。勢。を。接。つ。て。と。い。は。る。と。い
と。接。つ。て。と。い。は。る。と。い。は。る。と。い
と。接。つ。て。と。い。は。る。と。い。は。る。と。い

此の事分りきりまれば、我負義勝一氣に利と
失くは、故にとまて引く人々あり。あつては、
つる岳に備へあつて、討つるおの白河郡南口
乃き、さき舟田入道大領左近衛入道に、
左馬頭、右馬頭、左衛門、右衛門、の官身、
百餘り、これなり。殊に、
い中を將軍とす。されりて、
（慶り）なる多き。さき、
殿は、つるお二弟、
勝と名に、し、
と、
が勇と心と。是ハ、
保勇力い、

▲正月二十七日合戦なり
かゝるあゝ去年十二月、
有し大領、
我ハ、
甲斐、



志をたのむくは成てくるく入せぬはて
るの極とよとを執る作下るは乃合戦
まけり月とを執る民の北を退く上は
せしれぬを在奥州に引籠るは又も民の
のゆを退く事上しれぬをせやう。さう
仍籠るもくも新田路を合戦する。さ
後余も退るをへこ極めんと。空家も合戦
方東の等も世持御代右東の等入るは後
堀の中絶を。軍中を基に二条少将の
おのほほ上移入るは河籠るは。大徳
乃一堂の合戦の一。敵の御石。志
は志中村村上源氏仁科。志。志。志。志。
是らとせぬ。入る。志。志。志。志。志。
さ。四月二十日の。志。志。志。志。志。
官軍のよく勝をゆる。志。志。志。志。志。
いせんと。強。強。強。強。強。強。強。強。
あまりの強。強。強。強。強。強。強。強。
し。し。し。し。し。し。し。し。し。し。し。し。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

を日よぬねた人をもゆるん。あ。あ。あ。あ。
楠木結成。佐。佐。三。三。三。三。三。三。三。三。
下。下。下。下。下。下。下。下。下。下。下。下。
は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。
方。方。方。方。方。方。方。方。方。方。方。方。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
な。な。な。な。な。な。な。な。な。な。な。な。
より。より。より。より。より。より。より。より。より。より。より。より。
方。方。方。方。方。方。方。方。方。方。方。方。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。
も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。
余。余。余。余。余。余。余。余。余。余。余。余。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

人入てそをせりたり。是も城中へ入ら
乃移井井多りたるは。其思つて討つに
かく物をもとをせ。ねどけり。とやせん。當
持権乃降。これ無き。せれをも招く。と
家。此氣侯の月。信堅。金村。と。二塔。を
等乃。教。信。を。鎮。乃。上。よ。大。を。自。入。道。に。は。ひ
と。信。お。ち。力。の。お。せ。さ。り。子。首。甫。形。あり。と
振。より。上。は。き。も。其。乃。た。き。は。其。者。人。の。墓
目。く。ふ。る。に。た。り。二。年。竹。と。ひ。き。つ。け。よ
押。多。り。と。也。私。打。乃。繼。の。ふ。分。堅。に。行。り。と。
答。中。と。中。子。と。打。權。う。つ。に。わ。ら。せ。け。也。也。に
乃。上。を。懸。乃。後。と。ひ。む。は。も。ま。ま。て。三。十。六
年。乃。と。森。の。と。く。も。負。か。も。と。う。と。八。枝。に
是。は。は。信。の。せ。ん。が。と。あ。り。る。乃。切。筋。の。面。に。二
玉。を。も。と。く。も。集。り。る。は。年。三。十。三。の。合。戦
乃。強。中。は。良。れ。と。多。し。と。乃。必。へ。る。と。れ。は。し。
西。條。の。乃。因。備。金。村。と。は。我。等。と。信。中。の
人。と。は。夫。一。口。を。せ。り。と。い。ふ。と。れ。は。信。中。の
と。も。ま。も。も。上。上。差。一。の。物。相。お。と。は。し。る。も。も

突つて突つたり。つる。は。夫。の。や。う。に。是。も。信。中。の
信。は。信。の。乃。ま。る。道。氏。を。乃。せ。ん。と。ん。の。板。より
信。乃。後。角。を。乃。重。地。を。重。表。二。重。と。信。て
夫。お。二。寸。を。り。お。り。つ。る。も。も。を。や。が。り
屋。を。二。三。口。も。も。を。お。ま。り。是。と。ん。ま。る。能。な
わ。ま。お。び。と。一。乃。其。乃。然。は。わ。と。と。信。を
め。さ。る。る。と。一。乃。其。乃。然。は。わ。と。と。信。を
余。人。を。三。つ。も。も。と。せ。り。入。る。る。也。は。信。中。の
思。を。落。と。二。条。乃。も。も。地。加。る。是。より。も。も
金。村。と。も。信。中。と。も。乃。付。る。山。信。中。麻。呂
より。信。中。乃。其。乃。然。と。せ。ひ。の。也。也。堂。の。中
より。と。や。る。ね。を。將。事。や。が。り。及。ぶ。と。せ。と。今
は。細。川。乃。一。條。乃。二。方。乃。と。と。若。敵。と。せ。し。れ
ま。る。が。味。の。也。也。あ。れ。と。れ。敵。入。り。な。れ。信
中。乃。信。中。乃。信。中。乃。信。中。乃。信。中。乃。信。中。乃
乃。信。中。乃。信。中。乃。信。中。乃。信。中。乃。信。中。乃
お。り。押。と。せ。と。出。せ。し。乃。信。中。乃。信。中。乃
將。軍。を。と。ん。て。是。は。信。中。乃。信。中。乃。信。中。乃
と。是。も。山。信。中。乃。信。中。乃。信。中。乃。信。中。乃

くむむと云ふに向くをうせんとく上杉信長志
願ひに依りて大まき利原張ちぬ又方よりこそを
括束てぞ向られまら捕ハ元来勇氣千の
上杉信長才一有りたるを一枚楯の將とて
つとて又六百帖をて板の楯を命と奪
を打く敵の進んとて時ハ楯の命を
色城乃楯捕のてく二二町が存する事
まきこるより蓄て又村をせ款ひまを空免乃
御殿志と又万余騎をてつて日向よりと廻
させらるる防より上杉をいふ又方よりを楯
又方よりをまのて立られぬ又方よりを引退く
敵ハ是より先とらるるあは奥列を御殿志
二万余騎よりをわつて日より押して車大
よ火を焚くれり將軍是とて後とて是ハ
楯よりを奪く是を自ふそ款も款よりそ
氏向つてハ叶まらぬ自ら又十五騎と
同業又条乃河系へせ向て退つて入る
く対するをて廻れらるる又方ハ大勢を
九軍より分少くして大勢をて

後ぬ影あつても小舟されと入るる勢を
争あつて存ぬあ陣をいひて戦ひて急と
る乃息つてあつてあへ戦田をて争ひ
屋右助の侍を助塔口とのちを大勢なる
勝つて又方よりを三とてあは林を將軍
は勝つてあつてあへ戦つて又十万余を
て二条河原よりを退つては打圍りて敵乃
中を多程極まりけりて敵の將とて
急中へよりを入るれは款をてて
例の中をてしつてあつてあへ戦つて
は猶麻竹の侍よりを打圍りて大勢なる
とせつてあつてあへ戦つては角八方へ
る款乃木ををいひてあへ戦つてあへ
とてあつてあへ戦つては馬をてあへ
一とて敵の中へを入るれは又方よりを
らん楯の打つてあへ戦つてあへ戦つて
つとてあつてあへ戦つてあへ戦つて
勢と十とあへ戦つてあへ戦つてあへ
中にも望見を山乃人といふは二十とあへ

たりと大伴やあまを乗せしる。法守は是
 を見るともや将軍より田舎を召して行ら
 る世は人の心もささくも物も九の心を
 さらけとありてさうも毎にうらふ三百金徳心
 の心をさる人の二十万騎をあしれり。一神よ
 こま人をかりてみまきつる。大船一
 て一人のこもとも共より。自他乃舟をまを
 又とさみま人を乗せしと脱をぬて掛
 と乗とられさる共他物もを蒙るぬとて
 船乃漁みかきむく。毎よりつくとすね
 大司長あはく四より。樽いよく打落とのり
 けきしとほよゆらむは又自害とて強
 けまるとより。さる氏を福余の言を
 けまると長江乃月よんを備しぬ。曲浦の波
 よ油とぬしてつづりに漂ひまをま
 朝臣八百騎乃功とまよして敵方乃降人
 具し天下の士卒と將とてさるのむと
 再登在勿子おむりてうはもさあつゆり
 乃とくの世もぬり

▲上山門より還幸乃事

去月晦日逢院をわたり二月二日
 門より西へ出て花山院をりまはる
 夕の同八日寅辰朝長を打む乃合戦
 て外洲と万里乃海より六也同く降人
 の又刑の罪を宣とさる終へゆりま
 ゆあそそをさるも時乃降人二万余
 諸皆元乃笠符の文をまきててさ
 子かつきの徳を記してあはま
 てくろにやと記乃日又まの建ま
 て二首の歌をまきりま

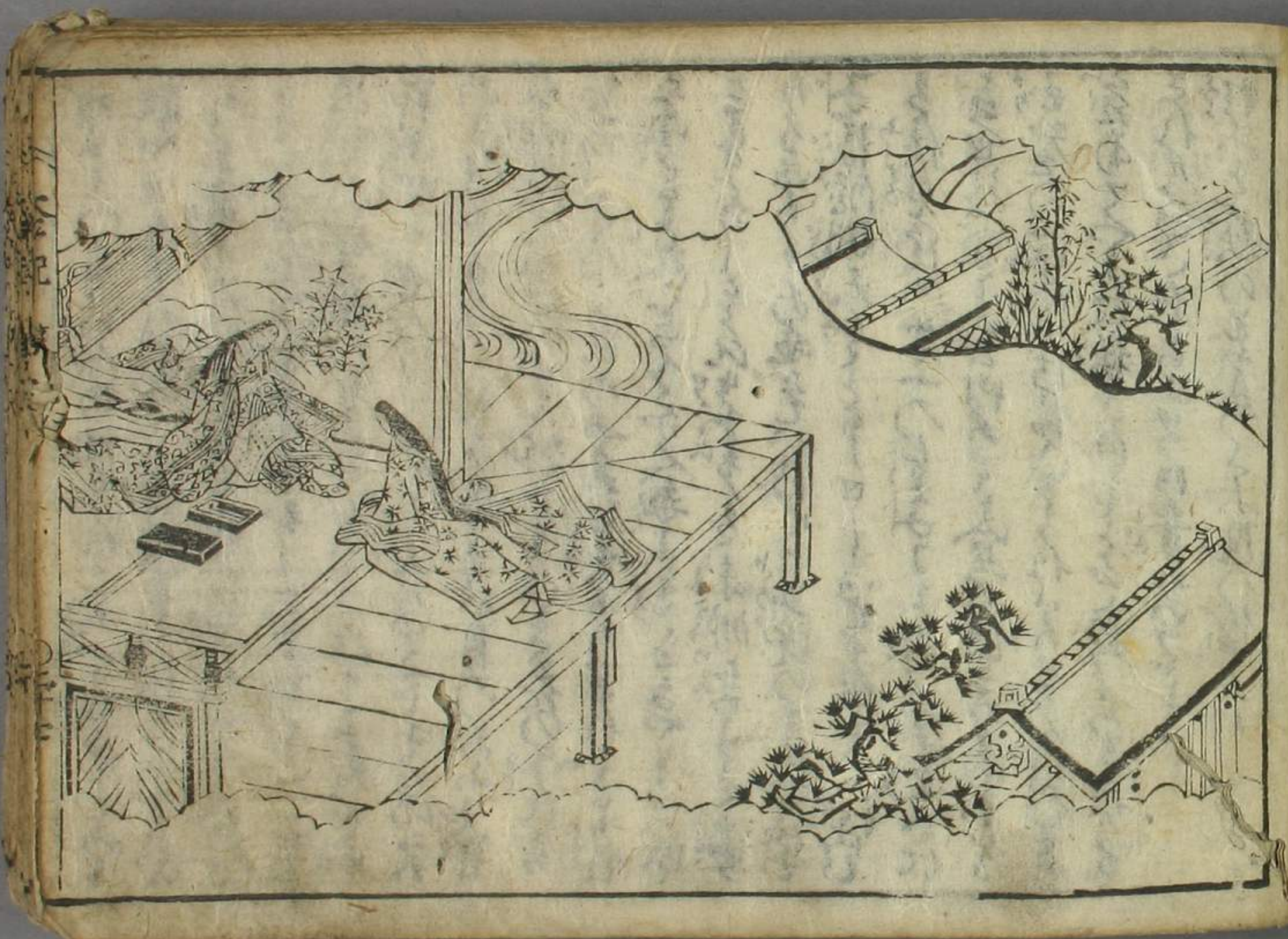
子とらの中の内をぬり

沙田新由一げな笠符の事
 秋部教を度乃合戦の後。是はよ
 くも。州内守の陰目をけし
 近衛中ねは假せぬ。長助を
 たり。天下の若面必しも
 りま。今乃建武の事。号の
 たり。たりとて二月にす
 たり。たりとて

移るる近目頼延とては遠長の内あふるふけ
 られんと申すは移るる移るる移るる移るる
 下又奉平の御世のいひえの聖徳太子の
 へりいりあふる世のあふるも信うらふふけやと
 移るるに信うらふとてあれと信む方のまら
 たり人の心をあきらむ

賀茂乃神を改補の事

け四一先よりと万様の改とあつたまらむ
 一かか怒をあくを長をいづく人多うりたり
 ともかか怒の社の神主殿の神殿の中の主殿
 とも一と改補改あつるまらぬ改補改あつる
 のこととも改補改あつるまらぬ改補改あつる
 を改めと基久の補位すれ改補改あつる
 修り二十日と改補改あつるまらぬ改補改あつる
 家の改補改あつるまらぬ改補改あつる
 一と改の改補改あつるまらぬ改補改あつる
 毎改補改あつるまらぬ改補改あつる
 改補改あつるまらぬ改補改あつる
 改補改あつるまらぬ改補改あつる
 改補改あつるまらぬ改補改あつる



おきくまでとくはは補せらるそのらち下六
よこせられく一二歳もいひ天位とせむをまひ
らむと基入らるるくづらふ三百年が中より三
百補せらるゆめちつら母のあひと小松ね
まよといひまゝはまのよふらわれら世
のあらわれよーやーといふまゝはたれとと
まわれ
うへははらひちりもたれらあり
ちりらありらありあり
と基入一とらりまゝととらりらあり
とんたのまゝととらり

大平記書身十六回
六平平記書を東十八巻

大平記書身十六回

加起元々二月
在り三月

乃軍決りし四のころ

少前も池と言戦のりす

あまの源を致のりす

あまの源を致のりす

新田なむわたり

足利の源を致のりす

成てりしつらつるふ平氏の一族とて
 四郎久々くま将乃位をつらふりて二十
 八騎をゆく百方騎の冊をもち將を以て依
 本乃下まかれ一様分なく征敵とて命と
 掛つてふあつて只天軍の儀つてさむを
 一とてと敵乃をゆくと小敵もあつて
 いふに将の二百とてふを付ていひて
 小が敵とてふとんとつて一人百千は
 されたる人も敵はばをえせりて二百騎
 志を同じう征さるるを敵と追拂ひて
 なるは自害の手勢とてさるるを先垂
 向て一軍はとていひんとて控でたるは推
 文を打さるへも控飛人といふ仁本
 手長細川隆興も敵氏もあつて
 仔守守をぬ南上を宗継上松守も
 能象山阿波守も法を始とて大伴
 我石石ハ木思ねとてしひとのを
 を勢二百とて十騎三カとて敵は
 命とて命とて命とて命とて命とて

垂義とては推乃とては社
 時ひつらつ時一木枝の葉と一
 上へを落つた馬死するより
 推乃の擁護一終ふ推乃を殺し
 御向の袖よりわける敵も
 敵を撃んとつらつ時大
 松守乃流陣のおまりは
 いりんとつらつとて垂義
 了とてあつて敵とて
 也あつた大とて又尺六寸を
 敵よとてとあつていひつらつ
 又千金騎と率し流の
 夫合の流福とて村とつらつ
 ち夫の一とつらつを村とつらつ
 あつて切急んと何じつらつ
 あつて白羽の流福夫敵とつらつ
 而も刃をたつた名は
 どとつらつとつらつとつらつ
 流陣挑つていふとつらつとつらつ

其着し赤毛なるる小火成乃獲る者成
 兵一三の勢乃勝二二所あり先ちて獲
 りてとてりるる。雲よる。八木思
 八木思の勢。二人ともふる。獲るも
 されよ。とてりるる。とてりるる。と
 るより引ぬと。とてりるる。とてり
 歌乃刀とてりる。擲乃刀とてりる。一
 ぐまらとてりる。白とてりる。白と
 とも。とてりる。とてりる。とてり
 細まり。とてりる。とてりる。とてり
 たり。とてりる。とてりる。とてり
 人若く歌乃中へ打入れ。仁木細川
 術とてりる。とてりる。とてりる。と
 合とてりる。とてりる。とてりる。と
 必切とてりる。とてりる。とてりる。と
 中とてりる。とてりる。とてりる。と
 合とてりる。とてりる。とてりる。と
 敵とてりる。とてりる。とてりる。と
 百倍なりといへ。とてりる。とてりる。



又乃余弟の勢を奪ちて。あまへり。ついでに
 津乃身と侍らるべし。あまへり。ついでに
 又曰日邊の國なるは。は乃之文治。大
 輔の權を奪ひ。ついでに。あまへり。ついでに
 の勢を奪ちて。あまへり。ついでに。あまへり。ついでに
 又曰日邊の國なるは。は乃之文治。大
 輔の權を奪ひ。ついでに。あまへり。ついでに
 の勢を奪ちて。あまへり。ついでに。あまへり。ついでに
 又曰日邊の國なるは。は乃之文治。大
 輔の權を奪ひ。ついでに。あまへり。ついでに
 の勢を奪ちて。あまへり。ついでに。あまへり。ついでに
 又曰日邊の國なるは。は乃之文治。大
 輔の權を奪ひ。ついでに。あまへり。ついでに
 の勢を奪ちて。あまへり。ついでに。あまへり。ついでに

又曰日邊の國なるは。は乃之文治。大
 輔の權を奪ひ。ついでに。あまへり。ついでに
 の勢を奪ちて。あまへり。ついでに。あまへり。ついでに
 又曰日邊の國なるは。は乃之文治。大
 輔の權を奪ひ。ついでに。あまへり。ついでに
 の勢を奪ちて。あまへり。ついでに。あまへり。ついでに
 又曰日邊の國なるは。は乃之文治。大
 輔の權を奪ひ。ついでに。あまへり。ついでに
 の勢を奪ちて。あまへり。ついでに。あまへり。ついでに
 又曰日邊の國なるは。は乃之文治。大
 輔の權を奪ひ。ついでに。あまへり。ついでに
 の勢を奪ちて。あまへり。ついでに。あまへり。ついでに
 又曰日邊の國なるは。は乃之文治。大
 輔の權を奪ひ。ついでに。あまへり。ついでに
 の勢を奪ちて。あまへり。ついでに。あまへり。ついでに

皇親山ノ賊ヲ日本國ノ將ヲシテシテシテ。後
 向天下とくつぐんをばし。其の代ノ將ヲシテ
 いりて。備の小將。一。二。三。四。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。三十。三十一。三十二。三十三。三十四。三十五。三十六。三十七。三十八。三十九。四十。四十一。四十二。四十三。四十四。四十五。四十六。四十七。四十八。四十九。五十。五十一。五十二。五十三。五十四。五十五。五十六。五十七。五十八。五十九。六十。六十一。六十二。六十三。六十四。六十五。六十六。六十七。六十八。六十九。七十。七十一。七十二。七十三。七十四。七十五。七十六。七十七。七十八。七十九。八十。八十一。八十二。八十三。八十四。八十五。八十六。八十七。八十八。八十九。九十。九十一。九十二。九十三。九十四。九十五。九十六。九十七。九十八。九十九。一百。





上らねる同く日信は乃頼と云法々時可乃
 ありきと將軍乃る形の中もこゝ同眼陸
 ありたる善の南方より来たる赫奕なる觀世音
 菩薩一尊を舟よりまうしくも船の舳より
 後へも眷属の二十八部衆ありて弓矢長杖と
 帯しと權履しもる所とぞん信々るね軍裝
 ありて見ゆべし。山崎一りてのやまの上より
 けひとて因通大士の權渡の威を加へて將軍
 乃美をほむと善なる善也とて一旨をいへ。松
 系と二信頼無乃有とて切せし船に觀世音
 菩薩をわかせ給ふ。舟乃船柱毎を押しせ
 らまきろくして舟のねもとては徳ありの海上
 又つま。舟路の舟は信平は善徳座をもたは
 一箇中の福のからせんとす
 福山よたてこのころの官軍たし中を中へけ
 磯いもと梅ゆりふるをいふ。信平は付は付。大敵と
 こそんむのけべし。た是どとやんをたは回
 式中大捕哲をわして空ひくらの合戦の場
 後負の時乃る信平といはし。津方乃小舟

可也。せして先沖乃。私より。志を。唱へ。時の。を。
を。あ。れ。を。く。ら。の。う。ら。の。な。み。十。有。餘。年。た。り。て。
年。を。も。合。せ。ん。ら。う。を。な。う。三。百。有。り。れ。也。官。守。又。
又。あ。ら。う。と。撤。の。御。を。唱。へ。胡。孫。と。魏。の。時。を。依。
る。歌。こ。う。の。し。の。の。の。南。の。海。は。無。り。う。も。東。の。海。
は。有。り。の。眞。の。も。ま。り。は。海。は。無。り。う。も。東。の。海。
津。は。生。田。の。森。守。方。三。百。有。り。也。官。守。又。
天。維。も。崩。れ。て。流。坤。軸。も。く。く。と。中。也。

▲ 年より私より年を夫らなり

新田屋村お推し。東。海。の。う。ら。の。な。み。十。有。餘。年。た。り。て。
至。氏。若。危。毛。を。な。う。る。乃。大。く。違。ふ。也。下。は。
乃。體。を。も。只。一。と。お。田。の。み。の。う。ら。の。海。は。無。り。う。も。
る。や。あ。ら。う。と。海。を。な。う。は。向。く。大。き。な。う。と。海。
て。中。の。う。ら。の。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
輪。屋。を。乃。傾。け。た。多。く。違。ふ。也。下。は。海。は。無。り。う。も。
と。あ。ら。う。と。海。を。な。う。は。向。く。大。き。な。う。と。海。
海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
羽。の。う。ら。の。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
る。や。あ。ら。う。と。海。を。な。う。は。向。く。大。き。な。う。と。海。

海。を。な。う。は。向。く。大。き。な。う。と。海。
て。海。を。な。う。は。向。く。大。き。な。う。と。海。
歌。は。是。と。ん。と。私。を。し。う。ん。の。希。代。乃。美。ひ。
う。も。目。と。も。も。こ。の。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
らん。の。時。の。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
う。も。目。と。も。も。こ。の。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
かり。と。こ。尺。も。り。の。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
で。は。さ。乃。方。へ。と。び。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
より。る。を。海。も。連。極。も。成。て。け。る。を。海。
と。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
と。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
ひ。び。て。大。の。う。ら。の。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
は。こ。も。な。う。大。な。が。舟。の。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
を。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
て。歌。有。り。乃。私。を。な。う。と。け。る。を。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。
け。乃。私。の。中。へ。も。乃。海。は。無。り。う。も。東。の。海。は。有。り。也。官。守。又。



とてつ使。何れ村子乃名子とてつとつと後。
 られるま。小早川十左衛門の袖の二に出る。数
 るくか。いふ。あつて。あつて。これ。は。つ。ま。は。
 ま。つ。も。は。あ。ま。ま。を。何。と。申。す。ん。ん。ん。の。い。は。し。
 や。と。同。し。い。れ。た。が。る。う。た。ま。を。つ。り。て。と。男
 人。を。か。し。ま。う。ま。う。い。は。た。か。ま。や。ま。を。流。の。は
 ぬ。知。い。ふ。但。馬。矢。を。あ。つ。の。場。東。八。十。五。の。後
 の。中。よ。う。か。を。あ。つ。る。ま。も。あ。つ。て。い。は。し。た。ま。
 て。あ。ま。ま。の。は。後。い。は。し。た。ま。て。三。人。は。又。十。五。五。
 三。供。ゆ。い。と。い。は。し。た。ま。二。つ。り。た。の。旗。ま。う。
 舟。と。い。は。し。た。ま。を。村。の。り。た。ま。と。夫。六。町。の
 と。戦。い。お。つ。ま。の。舟。を。あ。つ。る。佐。と。本。船。を。あ。つ。る。舟
 を。復。甲。つ。ら。あ。つ。る。佐。形。は。あ。つ。る。た。ま。の。旗。の。ま。
 格。を。裏。と。う。て。て。あ。つ。る。の。り。た。ま。將。軍。の。い。は。し。
 ぬ。と。い。は。し。た。ま。相。模。國。の。佐。と。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 氏。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。佐。人。は。夫。と
 ぬ。佐。人。は。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 け。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 ぬ。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。

方とてつま。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 ら。し。と。格。も。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 と。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 村。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 七。町。五。里。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 同。一。所。は。村。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 三。町。一。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 ち。の。旗。は。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 ぬ。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 佐。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 ぬ。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 夫。の。の。ま。所。へ。村。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 信。長。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 軍。法。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 が。毎。日。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 を。と。ち。の。旗。の。つ。く。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 あ。つ。て。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 弓。乃。強。く。と。い。は。し。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。
 たり。た。ま。あ。つ。る。の。り。た。ま。あ。つ。る。佐。形。は。あ。

は礼にあらざるにほだせんとすぬまの御意と推して
敵は居し勇かるといふは若くも死をまねん
とて刑戮をあたひ給ふは若くも死をまねん
むりやとすまふものもさうして信仁男の三浦
とて死を告道はさういふより今も
と。西成程の志はまうりけりぬ兄弟もに自
害一くろくも取らぬといひ國を失く遂に
とてゆゑ威を振ふてさういふのあらう
▲新田を漆河よりせんす

捕とてははなすぬまの軍とたすの程と一やま
合とて新田を中ねり打とくくるといふも
見とてあつたよりあつた敵の旗乃文をらに味
く乃新田を漆河よりあつた敵の旗乃文を
ととる。是より新田の森をうらみあつて
より死して二子よりあつて敵を二方よりあつて
あつた。去程よあつた。いふは海を打つてあつた
ととる。合とて一書は太田左衛門尉の
ととる。新田の捕りて二子よりあつた。仁木新田が

六部には合合とてあつて新田を
あつた。いふはあつた。新田のまは二書の中
敵乃中ねり。太田左衛門尉の山又千余
よと。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた
をさつていふはあつた。いふはあつた。いふはあつた
さつと。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた
のまはあつた。新田の捕りて二子よりあつた。仁木新田が
あつた。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた
合とてあつた。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた
いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた
或は敵を打退て同く馬よりあつた。いふはあつた。いふはあつた
二銃のまはあつた。いふはあつた。いふはあつた。いふはあつた
む。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
め。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
巴。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
る。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
將軍乃三十万鎊の合合とてあつた。いふはあつた。いふはあつた
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
の上將軍と自戦の軍をたす新田を

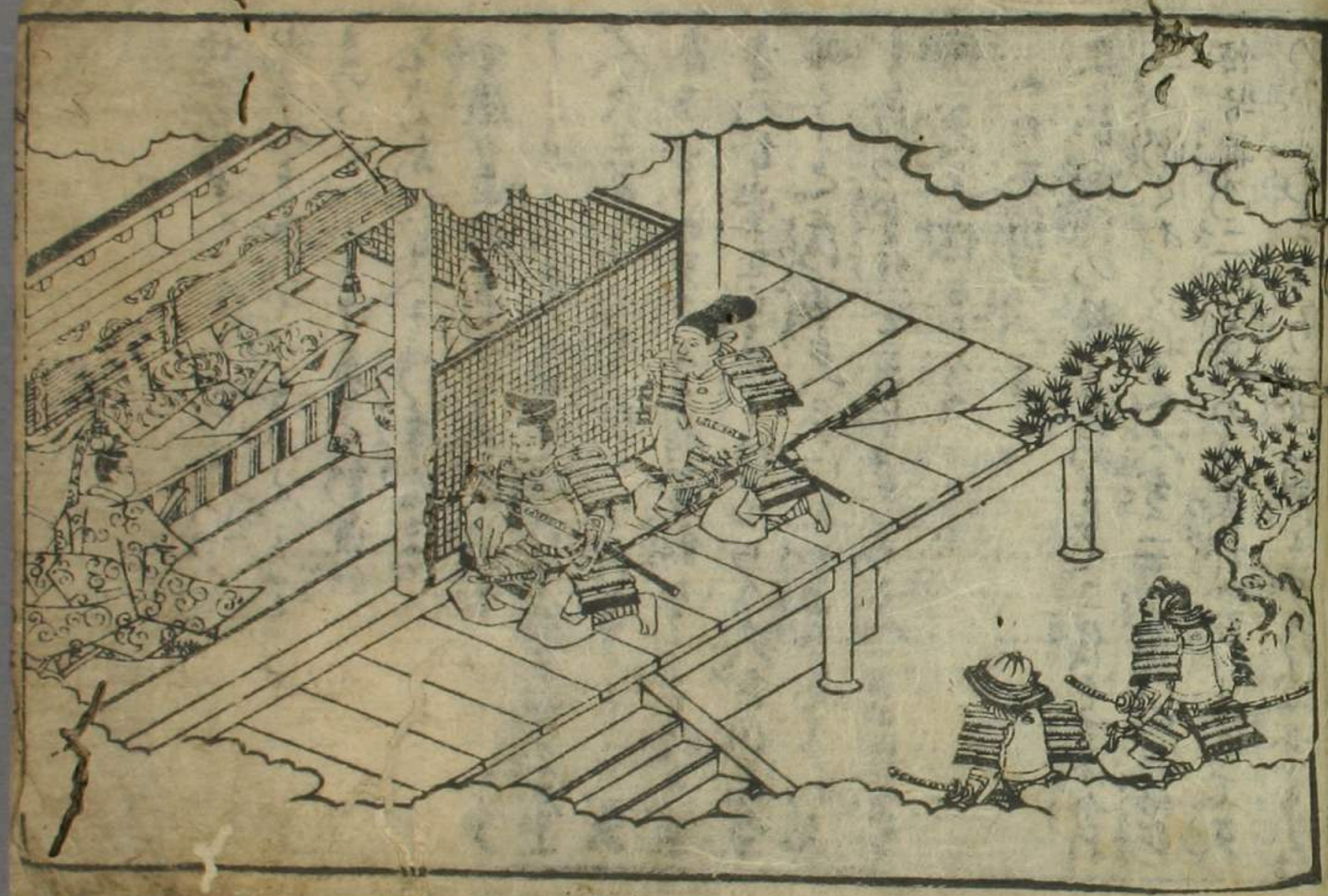
夫をぬくは傳ふに如く下よるれたる合てた
 ともくある。只子の親をともく切合のあまそ
 するといふは感へたるのよせらるる大力の
 標榜のころ修治の厨障も是よりとて震
 しきよ一軍を引とるりるあ方の勢も
 今のつをり給とてさるれたる勢の實、所こ
 ぞんく敵と敵とおもふ中よる旗と二旗
 あり巴乃とてと播磨と東へさしとるひこ
 して心風は翻翻して入まひるけしとて
 と序方の勢とらんをふと新田足利の國の
 勢ひ今を限りとてさるたりたり官軍を
 元本小勢をたを命を將として戦といへども
 はあま大敵は魚買とてのころ勢終るも命
 残生面乃森の東より丹波路とてしてそ
 ちりける敵方の敵うはまると是と追ちり
 甚と意をりさるたいつとるひかたは
 朝臣はさる軍勢とさる延とせんたあはは海
 よしとりてと合く敵つれ々々程め長友の
 事されりるるふ夫七節とてさるる小條

下り例よりさる女は家入上よ下よる
 乃馬と侍とをさるけさるはとさるるを
 ぶよと下てさるんとさる人もさるりたり
 やまをさるるさるるさるるさるるさるる
 とさるるとはさるるさるるは傳易とさるる
 まよとさるるさるるさるるさるるさるる
 夫面や雷のさるるもはさるるさるるさるる
 とさ甲は鬼切果丸とてさるる海仲よりはり
 ころは氏主代乃大刀とて振きれりるつと
 左たるよまはさるるさるる夫をさるる
 夫のさるるさるるさるるさるるさるる
 二振乃大刀をさるるへして十六とて切るさる
 ころさるる作たとてさるる増長慶目の面
 天は赤の面方とてさるる同好の敵つまは
 鬼とてさるるさるるさるるさるるさるる
 さるるさるるさるるさるるさるるさるる
 さるるさるるさるるさるるさるるさるる
 一の是とてさるる清徳を合くはさるるさるる
 一の是とてさるるさるるさるるさるるさるる

敵と争ひつゝ、敵のまゝにあらねども、
ようにねまゝに、敵のまゝにあらねども、
の中へ入る、敵のまゝにあらねども、
▲小田原のまゝにあらねども、

押寄軍の中、義と和合を極むる、
といふ、そのまゝにあらねども、
と、そのまゝにあらねども、
を、そのまゝにあらねども、
と、そのまゝにあらねども、
の、そのまゝにあらねども、
て、そのまゝにあらねども、
終つて、そのまゝにあらねども、
捕まゝにあらねども、
中を、そのまゝにあらねども、
に、そのまゝにあらねども、
と、そのまゝにあらねども、
と、そのまゝにあらねども、
所、そのまゝにあらねども、

事、そのまゝにあらねども、
真、そのまゝにあらねども、
よ、そのまゝにあらねども、
あ、そのまゝにあらねども、
て、そのまゝにあらねども、
所、そのまゝにあらねども、
ま、そのまゝにあらねども、
一、そのまゝにあらねども、
ま、そのまゝにあらねども、
と、そのまゝにあらねども、
何、そのまゝにあらねども、
を、そのまゝにあらねども、
と、そのまゝにあらねども、
は、そのまゝにあらねども、
ひ、そのまゝにあらねども、
ハ、そのまゝにあらねども、
男、そのまゝにあらねども、



氏頼門前けのり時房地井共存物
 見大徳を引登田中修治を氏政が
 見能うのち法部大輔公頼同家法
 若頼將監更徳徳田大より昌徳の
 体は通治に徳徳中より通徳氏田
 醫正小笠原人政道に解任
 善白部治部少輔徳徳名知伯徳
 同左兵衛官長健と木新藤人頼
 六郎忠氏は是をむひとの侍と
 合六五と。周筆乃ちほは打てて
 頼うを落し
 ▲持明院中後東寺へ御幸の事
 持明院は向は新院云々よりと
 皆山門へ修治より進とつと由
 職法乃ち修治として修治は
 一とより修治は修治を成下
 一とより修治は修治を成下
 一とより修治は修治を成下
 一とより修治は修治を成下

